

非常食研究会 EMERGENCY FOOD/DISASTER FOOD

非常食・災害食に関する備蓄・消費・物流など諸問題を検討する

地域安全学会 東日本大震災ワークショップ 2013 in 大船渡 & 出張先の風景

2013年9月20日

会場 岩手県大船渡市 カメリアホール

懇親会場 大船渡プラザホテル

主催：一般社団法人地域安全学会

地域安全学会は2010年6月に春季発表会及びシンポジウムを大船渡市で開催しました。

その時は、まさか1年後に大震災が起きると思っていなかったので、もう2度と来ないかも知れないと、さいとう製菓（かもめの玉子で有名）本店やあちこち訪れたのでした。



今回のワークショップの参加者にも大船渡にいろいろな思い出をお持ちの先生が多い様子で、2010年学会と同じ会場のホテル（奇跡的に内部リニューアルで再興）での交流会は、いつももまして楽しく盛り上がっていました。

個人的には、前回まで事務局の仕事をしていたので、初めて発表会場に着席できて嬉しく、本当に勉強になりました。

非常食研究会としては、自分達の発表（テーマ「被災地の余剰生産物を活用した循環型非常食」）がありました。地域安全学会では食に関する研究は殆どありませんが、今回のプログラムでは関連する内容もあり、また注目の発表を聴こうと2会場を行き来しました。以下その中でも特に注目した発表です。

・山口大学 村上ひとみ先生他：EEFIT（英国の調査団）による復興状況の調査
規模が大きい震災のため、復興過程を広範囲に調査。岩手・宮城6市で復興状況、NGO活動をヒヤリング。石巻街なか創生協議会、SAVE TAKATA、NPO桜ライン311、気仙沼の防潮堤計画等、岩沼の千年希望の丘プロジェクト、など。

・明治大学 中林一樹先生他：（代理発表小田切先生）：被災者の復興感に関するアンケート調査
被災3地域の旧住所へ調査表を郵送し30%の回答を得る。
特徴的には、住まい、収入（就労）、食生活という回答が共通して高かった。
生活に関する復興感に食生活の回復の程度が大きく関わっている。

・名城大学 柄谷友香先生：仮設施設による事業再開プロセス
陸前高田でのプレハブ店舗による事業再開の実例4件。
早い時期に再開した店舗は、非常な低成本で、良い場所を確保、売上げも良い。
ただし初期のため助成は受けられず、自力再開。あくまで仮店舗の状態。
他方、時間とお金をかけて再開した店舗は、一度従業員を解雇して後に再雇用する形を取り、
資金援助を受けながら、仮店舗というより長期経営を見越した店舗作りをした。
商業というものは復興の側面だけではなく、プラス生き甲斐にもなっている。

・富士常葉大学 重川希志依先生他：福島被災者の生活再建過程
エスノグラフィーの手法を用いた、福島県外の生活再建過程の調査。4人の被災者の例。
初期の段階では公的情報が入らず、何が起きたか分からず避難が遅れたケース、
原発事故を予測したり、家族の健康を優先して行動したケース。
共通するのは地元を離れるにつれ、情報が来なくなったり、
生活再建は自力での活動により成されている事。
地元への思い、生活再建が出来ていない人達に対する負い目など複雑な感情がある模様。

地域安全学会は毎年、春季発表会＆公開シンポジウムを全国の被災地で開催していますが、とても意義があると思います。東日本大震災ワークショップも、続けて行く方針との事。

出張先の風景：

大船渡 赤崎

港湾付近では、ガードレールは曲がったまま、流された住宅の跡地が草に覆われ原っぱとなつて

広がっていました。そうした場所にプレハブ店舗があり、復興隊による赤崎復興市場が開催されました。

美味しいそうな野菜を購入。皆さんの笑顔がまぶしかったです。

店舗の方にお話を伺いました：

高い鉄道の上を波が越えた。（鉄道の向こう側に、1軒だけ残った家は、記念館として保存整備） 用水溝の水位が上がって来た。津波が来るまでの30分で、

近くの丘や山に駆け上がって、助かった人が多かった。自衛隊が到着する迄は、作業所や集会所に集まり、パンや商品の残りを食べた。

山頂まで、自動車でも一気に登れるようになっている。

お話によると、過去も津波に襲われているため、大船渡の人の頭の片隅には、津波の事があるとのこと。こここの人は、日頃から、鍛えられている、という言葉が印象に残りました。



紫波農園(岩手缶詰(株)直営店)

ラフランス、ブルーベリーの果実および加工品、ワイン、ジュース、ジャム

また、水産加工品の缶詰、小岩井農場、近辺のお土産などを販売。

東京では銀座のアンテナショップで販売していますが、魚の水煮や味付け缶詰の一部のみなので、見かけない商品も多かったです。ここで食べたピザが、素晴らしく美味しくて、[花マル]！

帰宅して発見した事。3.11の後に被災地を訪れた際に泊まった仙台の旅館と、今回止まった旅館が同じでした。震災の直後は、無事だった建物の一部のみでの営業で、それでも被災地に来ている人のため懸命に営業されているような状態だったため、同じ旅館だと気が付きました。すっかり再建されていて、本当に良かったです。

地域安全学会 東日本大震災ワークショップ 2015 in 気仙沼

2015年10月3-4日

3日

一ノ関から送迎バス→会場の公民館

・気仙沼市より復興状況の解説

・A、B2組に分かれての発表会

・ホテル観洋で懇親会

4日

・8時視察バス出発→安波山より気仙沼を見渡す→宅地造成地域を、献花台のある高台より視察。震災前・震災後の航空写真で壊滅状態がわかる。

・7メートルの防潮堤、避難ビル指定の気仙沼合同庁舎。

・公開前の震災遺構 気仙沼向洋高等学校を視察。

平成23年に創立100周年を迎えた水産専門学校は海岸に近く、大規模改修工事完成目前に被災した。3月11日は最後の授業日で、170名の生徒が残っていたが無事に避難した。

約20名の先生と工事関係者は4階建ての校舎屋上まで逃れるが、津波第1波は腰上、第2第3波と高さが上がり4階の高さに到達した。

津波は手前の冷凍工場にぶつかり勢いが多少緩和された。冷凍工場は流され校舎4階ベランダに激突したが正面直撃を免れた幸運も重なり、全員無事であった。

・当時のままの校内をヘルメット着用で視察。頭上から様々な物が垂れ下り、足下は被災物だらけで、気を付けないと危なかった。古い教室をパソコンルームにするためだったらしく、床材や機材が散逸していたり、流されてきた車が突っ込んでいたり、魚のミイラが黒くなっていた。黒板には、水が引いた後から関係者が書いたメモやメッセージが残されていた。

この校舎は震災遺構として保存するそうである。





・リアス・アーク美術館の常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」見学。美術館の学術員が被災直後から撮影した写真と被災物、地域の人々の言葉などが展示されている。「私たちが先送りにするべきは自分たちの権利や幸福であって」という自己犠牲の言葉が重く切ない。

・陸前高田市、奇跡の一本松と、盛り土を運ぶ巨大なベルトコンベアを視察。松は海水のため枯死したが、幹本体内部にカーボン樹脂などを入れたり枝は型を取り、レプリカのモニュメントになった。大変大きい木であった。

→一ノ関で解散。

地域安全学会 東日本大震災ワークショップ 2018 in 南三陸

2018年7月29-30日

29日

JR仙台駅から送迎バス（ホテル観洋）→さんさん商店街で見学・昼食→南三陸町役場庁舎

会場は隈研吾氏による庁舎のロビー。

・南三陸町長より復興状況の講演。町長は防災対策庁舎で奇跡的に助かった1人という。その庁舎は震災遺構にするかどうかは遺族の賛否がありなかなか決まらずにいる。しばらくは県有化され保留状態である。遺構として保存することの意義に賛同する声、悲劇の現場を目にする辛さ苦しさを抱える遺族の撤去を求める声など様々な意見を調整する難しさが明らかに。南三陸町は高台移転を早々に進め、隈氏のデザインによる、全体を回遊するようなまちづくりをめざして工事中であった。また、木材のFSC認証、カキのASC認証取得など積極的な取り組みも紹介された。

・A、B2組に分かれての発表会

・ホテル観洋で懇親会

30日 午前

・視察バス出発→南三陸ホテル観洋「語り部バス」。被災者となったホテル従業員が当時の様子や現状を伝え案内をするもので2012年より運行。2017年度第3回ジャパン・ツーリズム・アワード大賞受賞。

戸倉地区の中学校・小学校→災害公営住宅を視察。中学校に残るモアイ像はチリ地震津波の被災のご縁で贈られたもの。かつての住宅地は原っぱの工事現場になり戸倉小学校は跡形もない。先生や生徒は高台へ逃げ、最後は神社へ逃げて助かった。

ホテル観洋が所有する高野会館（民間震災遺構）は内部を見学。当日は町の高齢者の芸能発表大会を開催中。従業員の1人が屋上から海面が引くのを見て、チリ津波の知識から津波が来ると判断して、お客様を屋上へ上げ、327名と犬2匹の命が救われた。中はすっかり破壊されているのに何故かお社だけ無事の不思議。

車内では、防災対策庁舎で奇跡的に助かった人が屋上でアンテナの所にしがみつく人々を撮影した写真を見せていただく。



午後

・南三陸→女川へ移動。途中で仮設住宅や石巻赤十字病院が見える。

・女川フューチャーセンターCamassにて、NPO法人アスヘノキボウの方に復興について伺い、女川駅や周辺施設を案内していただく。女川町は、8割が津波被害を受け人口8%が亡くなつたが、民間・行政で若い人たちが復興を任され進めて来た。

新しい商店街は素敵なテナントがいろいろ入っていて、視察会の途中に、予想外に買い物をした。シンボルとなる女川駅舎は町の所有でJRはテナント。ゆぽっぽという銭湯施設が入り魅力的。商店街シーパルピア女川は、10数年後など将来的に時代に合わなくなつた場合、解体費が建設費の5倍かかる事などを考慮して設計された。

女川は高い防潮堤を築かず、3レベルの嵩上げにより、生命や財産を守りながら再生の力を蓄え災害に備える体制を取つた。

→JR仙台駅に戻り解散。